

経済活動によって発生する温室効果ガスの排出をどう削減していくのが、世界的な課題となっている。日本でも、多くの企業がこの課題に取り組み、排出削減目標を立てて対応を進めている。

こうした企業の行動は、企業の評価にも大きな影響を及ぼす。投資家や株主は削減の取り組みで成果を求める。また、大きな成果を上げる企業にはグリーンファイナンスという形で環境を重視する資金がつきやすくなっている。グリーンボンドと呼ばれる環境を重視した債券は、昨年時点で4100億ドル（50兆円を超え）規模となった。日本にとって、この資金をどれだけ日本に引っ張ってくるかができるかが重要な課題となっている。

企業の温室効果ガス削減の成果は、責任と貢献という二つのタイプ

東京大名誉教授(国際経済学)

伊藤 元重

論壇

温室効果ガス削減責任と貢献

に分類することができる。責任とは、企業が生産や販売などの活動で発生させる温室効果ガスを削減することを意味する。生産のために利用する電力を再生可能エネルギー由来のものにしたり、省エネを進めるなどの行為は、排出削減の実行にあたる。企業がこうした責任を果たすことは重要だが、これだけでは企業

に分類することができる。責任とは、1カーから見れば、排出抑制に貢献したことになる。温室効果ガス対応を進めることが社会全体の流れとなっている中では、責任は企業にとつてコストとなるが、貢献は企業にとつて利益機会の増加となる。

には負担になるだけである。そこで注目されるのが、貢献の部分である。例えば家電メーカーが生産したLED照明を野球場に設置すると、旧来の照明に比べて温室効果ガスの排出は60%程度削減されるといふ。こうした行為は、球場側からは温室効果ガス削減のために責任を果たすということになるが、家電メ

はモノづくりが得意な国だ。LEDのような照明設備だけでなく、水素ネットワークのための機器、再生可能エネルギー利用のための製品など、温室効果ガスの削減に貢献する様々な製品を開発・生産できる能力を持っている。これらの製品の開発や生産の貢献をきちっと評価することで、貢献につながる行為が広がる

はモノづくりが得意な国だ。LED

はモノづくりが得意な国だ。LED

はモノづくりが得意な国だ。LED

はモノづくりが得意な国だ。LED

ことを期待したい。

もっとも、テクニカルには難しい問題もある。先ほどの野球場の例でいえば、LED照明に替えることで野球場は温室効果ガスの排出を抑制したと主張するし、電機メーカーも削減に貢献したと主張する。同じ行為が二重にカウントされ、排出削減が過大評価されることになる。これをグリーンウォッシュと呼ぶ。グリーンへの努力を過剰に評価してしまうという意味だ。

こうしたテクニカルな問題をクリアする必要はあるが、排出抑制への貢献部分をきちっと評価することの重要性はいささかも損なわれるものではない。社会全体として貢献部分をきちっと評価する仕組みを作ることで、企業にビジネスチャンスを与える形で排出抑制を進められるようにしたいものだ。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。